

調」研究によって認知社会言語学への道が拓かれるということをも意味すると言える。

### 5-3. 「話調」研究の今後の課題と展望

以上、本研究での結論を踏まえ、はじめに5-3-1では今後の課題について具体的に考える。次いで、5-3-2では「話調」研究の将来的な展望、より長期的課題について述べる。

#### 5-3-1. 「話調」研究の今後の課題

「話調」研究の今後の課題の一つは、話者や聞き手の年齢や性別、社会的属性別、談話場面別に「話調」の異同を共時的に幅広く明らかにすることである。特に本研究で扱えなかった、より改まりの度合いの低い雑談や複数話者の重複発話が含まれるような話し合いについても詳細に観察する必要がある。また各言語・方言間の比較「話調」論なども可能であろうし、方言と共通語の使い分けという面からパラディグマティックに「話調」を扱うことも可能であろう。非日本語母語話者の「話調」を扱えば、日本語教育や対照研究に資することもできると考える。それと同時に本研究では扱えなかった句末イントネーションの型も含め、日本語に現れる各種の句末イントネーションの型について、それぞれの境界を知覚実験により明確にすることや、典型を明確にすることも重要な課題である。このような「話調」の共時研究を進めていく上で必要になるのは、第4章でもその不十分さを指摘したが、「場面論」という大きな枠組みの構築であろう。これはまた日本語研究に独自の分野と考えられる「言語生活」研究とも関わってくるだろうが、これらの知見を総合した、何らかの理論的な枠組みが必要になると考えられる。

さらに「話調」の通時的研究も無視し得ない課題である。第2章でも触れたように、社会の変化につれ人々の言語生活にも変化が生じる。端的な例として、戦後民主主義は一般の人々にパブリックスペースでの発言という場面をもたらした。また最近の例としては携帯電話や電子メールの登場によるコミュニケーションの形態の変化が挙げられるだろう。そこでの文(話)体や表記などが新たな言語学的関心事であることに疑問の余地はない。このような新しい媒体の出現による言語空間の拡大は技術革新のたびにこれからも生じ得る。また、日本語を母語としない人が増えたり、生育地とは異なった地域で社会参加する成人が増加したりするなどの人口移動によっても、新たな言語空間が創出される可能性がある。実際、第2章で述べたように日本人の言語生活に現れる各種の談話場面の内容も変化してきたし、これからも変化し得ることを考えると、通時的な視座は不可欠である。文字資料に比べ場面のバリエーション的にも、全体量的にも限界はあるが、古い録音資料などをもとに

過去の「話調」からの通時研究は可能だと考えられる。

その際、単に通時的な「話調」のバリエーション研究にとどまらず、各「話調」の現れる場面そのものに関する社会学的洞察も必要だろう。「ネ・サ・ヨ運動」やいわゆる「尻上がり」イントネーション非難など、言葉に関する様々なバッシング、非難の背景には、その言語形式の使用者に対する非難や排斥が潜む恐れがあることを第2章で指摘した。言葉は各談話場面と切り離してはありえないことを考えると、「言葉」に対する評価は、単に「言葉」だけの問題ではない。常にその言葉を話す人、社会集団と不可分の問題が存在するのである。言葉が話される社会とその歴史から「言葉」をめぐる問題を学ぶ意義は小さくないだろう。さらに特定の語や表現についての評価だけにとどまらず、日本語そのものを日本人はどう捉えてきたのか、という「日本語観」の変化に関する知識社会学的な考察も必要だろう。この点については、「場面論」の問題とともに次にもう少し詳しく述べる。

### 5-3-2. 「話調」研究の長期的展望

5-3-1では「話調」研究の課題として共時的な研究と並んで通時的研究の必要性を述べた。個別の場面ごとの共時的研究だけをとって見ても、一朝一夕にできることではないことは言うまでもない。さらに通時研究となれば、資料収集にも一層の困難を伴うだろうし、不足する音声資料を補うためにも膨大な社会言語史的研究も紐解かなければならないだろう。「話調」は発話の場面と切り離して考えることができないし、発話の場面の捉え方には個人差もあるが、世代差や性差、階層差なども見られるから、どうしても社会そのものを考えないわけにはいかない。その点から見ても、「場面論」に関わる大きな枠組みと歴史的な視座は不可欠であろう。これらを通じてこそ、日本人と日本語と日本社会をより立体的に明らかにできると考える。

ところで、「話調」というものが実際にあって、それが計測可能なものであるということの本研究では述べてきた。そして、将来的には通時的、共時的に様々な「話調」について実証的に明らかにしていきたいと考えているわけだが、一方で、これが逆に偏見や差別のものさしになりはしないか、という懸念がある。

つまり「良い話調」、「悪い話調」、あるいは社会的に「好まれる話調」、「嫌われる話調」のようなものから、「正しい話調」や「間違った話調」などを、暗に示すものから故意に誇張するものまで、将来的には様々な「話調」論が生まれる可能性があるということである。本研究ではどのような「話調」であれ、日本語のバリエーションの一つであり、それ以上でも以下でもないと考えて、それぞれの「話調」を扱ってきたつもりである。しかし、そもそも「話調」に着目したのは、ある種の「話調」には独自の色(その色には上下や優劣を暗示するような何らかの序列のようなものをまとう場合が多い)が付

けられているように感じたからである。「話調」を扱う際には、音調という物理的な数値のみを扱うことによって感情的価値観を排除しようと努めたが、最終的に実際の場面や文脈に戻したとたん、完全に相対化することが難しくなる。どうしても「上手な」あるいは「流暢な」などの価値観を反映した言葉を使わざるを得なくなった。このことは一方で、「間違った」、「下手な」、「標準的でない」のような説明があり得ることを示している。

本来このようなレッテル貼りのために「話調」研究を行うのではなく、レッテルが持つ本当の意味や、レッテル貼りのものが持つ意味について考えることに、「話調」研究の主要な意義がある。しかし、「話調」研究自体がレッテル貼りに貢献してしまう危険性がある、ということを常に自覚して研究を進めていかなければならないだろう。そこで「話調」研究を進めていく上で、認知言語学的な視座が不可欠であり、レッテルの指す内容とある事柄のレッテルがどのように一致しているのか、また、どのように乖離が生じるのか、ということを常に明確にしていく必要がある。「話調」の違いをもたらすもっとも大きな要因の一つは「場面」の違いだと考えられるが、この「場面」の捉え方自体に世代差があることは、本研究第2章で見てきた。したがって、「場面」の捉え方そのものについての客観的な考察を可能にするような「場面論」が必要である。そして同時に、それさえも相対化するような、先に述べたような「日本語観」そのものについての知識社会学的研究も必要だと考えられる。つまり「日本語」の全体像(あるいは「日本語イメージ」)を外から見て(注2)、扱っている「場面」や「話調」の座標を常に確かめる視座が必要だということである。

近年、社会学や歴史学において「単一民族としての日本人・日本文化」の神話の崩壊が指摘されるようになった(杉本1996、小熊1995、大沼1986、網野1990など)が、これは単一の日本語、統一された日本語という神話の崩壊ともパラレルな事象だと考えられる。社会の変化に伴って、日本人の意識も多様化しつつ変化してきていることは明らかだ。言葉に関して言えば、日本だけでなく海外も含めた各地の方言の存在に加え、「新方言」(井上1985)はまさにその実例である。第2章でも場面自体の捉え方に年代による差が見られ、それによって使われる言語形式にも違いが見られること、そして単なるその違いに様々な意味付けがなされたことについて、いわゆる「尻上がり」イントネーション現象を通じて観察してきた。このような社会と言語の変化を扱うことが社会言語学の主要な関心事の一つであることは言うまでもないが、さらに社会学で「日本人論」や「日本文化論」を扱うように、社会言語学でも「日本語観」や「日本語論」を扱うことは、日本語そのものが置かれた位置を相対化するために重要な意義のあることだと考える。

文化庁(2000)によると2000年1月の調査では、全体で85.8%の人が日本語は「乱れていると思う」と答え、年代による差もほとんど見られないことがわかる。最低の10代(16歳～19歳)でも82.1%の回答者が程度の差こそあれ、「乱れていると思う」と答えているのには驚く。「日本語は乱れている」と

いうことに関しては相当国民的合意が得られているようである。しかし、一体どのような日本語をもって8割以上の人が「乱れている」と思うのだろうか。さらに文化庁(2002)によると、2年後の2002年1月の調査では、「来れる」、「花に水をあげる」に関しては「言葉の乱れ」だと答えた人が概して若い年代ほど減少し、特に前者については「言葉の乱れではなく言葉の変化」であるとの回答が32.5%を占め、「来られる」でも「来れる」でもどちらでも構わない」の32.9%とほぼ同じ割合になっていることがわかる。同じ文化庁の調査にも関わらず「言葉の乱れではなく言葉の変化」という選択肢が含まれていること自体、2年の間に従来の「言葉の乱れ」意識からの変化の兆しが伺える。しかし一方で文化庁(2002)では、「察しの能力」について低下したと思うかどうかや今後の意味付けを問うもの、「美しい日本語」とはどのようなものを問うものなど、調査自体が従来と同様、依然としてある種の日本語観を示しているとも言える。このような日本語観そのものについての分析とあわせて、日本語観の実態を探る実証研究を進めることが日本人の言語意識、日本語意識を明らかにするためには不可欠であろう(注3)。

「話調」研究に際して不可避のイメージや印象などに関する問題を、できるだけ相対化して客観的に扱うには、「場面」に関する何らかの基準となるような理論的枠組において各「場面」やそこに現れる「話調」を見ていくとともに、日本語全体を相対化して見る必要があると考える。広い意味での言葉の使い分けに含まれる「話調」の選び方は、日本語全体の位置付けが変われば、当然それぞれの「話調」の位置付けも変わり、変化が生じるからだ。突き詰めていくと、単に「場面差」、「文体差」や「地域差」、「年代差」、「性差」などだけで割り切ることはできず、究極的には個人の選好や価値観の問題とも関わってくるかもしれない。将来さらに「日本人」や「日本文化」の「解体」が進めば、その傾向はますます顕著になることが予想される。(ただし、「国語」教育や「常識」教育の影響いかんでは、様々な社会的属性別の階層や「言葉の乱れ」的な国民的合意が形成され、固定される可能性も高いが。)

「日本語論」の変遷から「個人語」まで、「話調」研究からの飛躍は相当大きいかもしれないが、長期的にはこのような問題も射程におさめ得るという指摘と展望をもって本研究を終えることにする。